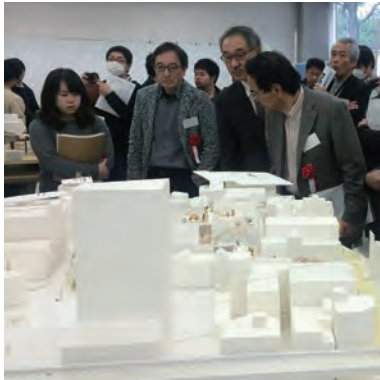


# Bulletin 2016 7



## COLONNADE

特集●第27回JIA神奈川建築WEEK かながわ建築祭2016

再考・まちのつかいかた 2

山口 賢 アマテラス都市建築設計

## FORUM

### 海外レポート

エコロジカルな建築、都市、ライフスタイルの発信地 オーストリア・ウィーン 6

渋川美佐 SHIBUKAWA EDER Architects

### 覗いてみました他人の流儀

荻野寿也氏に聞く 樹形の美しさを生かした庭づくりをしたい 8

荻野寿也 荻野寿也景観設計

### 学生卒業設計展

第10回JIA北関東甲信越学生課題設計コンクール2016報告 11

長田孝三 イズ

### 委員会活動報告

〈交流委員会〉第28回 交流大会・交流セミナー・懇親会について 12

鳥嶋吉浩 田島ルーフィング

〈保存問題委員会〉保存問題委員会の活動環境の変化と今後について 13

安達文宏 安達文宏建築設計事務所

### 部会活動報告

〈金曜の会〉発足からの歩みと現在の取り組み 14

日高敏郎 日高敏郎建築設計事務所

〈メンテナンス部会〉マンションの維持管理に求められる建築家 15

今井章晴 ハル建築設計

### 地域会だより

〈群馬地域会〉群馬地域会の活動について 16

曾田 彰 ソデアキラ建築設計事務所

### 日本版CABEを考える

コンペ・プロポーザル方式による選定業務をJIAは支援します 17

後藤克史 アパートメント

## BACKYARD

JIA建築家大会2016大阪 開催のお知らせ 18

本の紹介「大人向け？子ども向け？」 19

浦 絵美 ユー空間設計事務所

## 第27回 JIA 神奈川建築WEEK かながわ建築祭2016

テーマ

## 再考・まちのつかいかた

日時：2016年2月26日(金)～2月28日(日)  
 会場：みなとみらい線馬車道駅コンコース  
 小田原駅前地下街ハルネの広場



かながわ建築祭担当  
山口 賢

JIA 神奈川の活動を広く市民、行政への周知の場として位置づけ、JIA 神奈川建築WEEKを開催してまいりましたが、今年は27年目を迎え、昨年までの「横濱建築祭」から「かながわ建築祭」と名称を変更し、広く神奈川全域を対象に多くの自治体、市民と建築、地域、都市に関する魅力、まちづくりに関する諸問題を共有し、歩調を合わせて建築文化を育む姿勢をより強く打ち出したいと考えました。

私たち JIA 神奈川には200余名の建築家が所属し、神奈川を拠点としながらも広く世界をフィールドに設計、教育、生産、啓蒙、社会活動などさまざまな活動を展開しています。飯田善彦代表が掲げた「Think Local Act Global」をスローガンに、より地域に寄り添いながら広く世界にかかわっていく姿勢を表明し、各研究会の活動やワークショップを充実させ、目に見える成果を上げてまいりました。その1年間の活動を発表する場として、会場を構成し、JIA 会員同士の交流、市民、行政との連携をより深める良い機会が形成できたと思います。



## ● かながわ建築祭2016 概要

テーマ

「再考・まちのつかいかた」  
 みかんぐみ/曾我部昌史氏による企画立案。

会場

みなとみらい線馬車道駅コンコースを会場としました。馬車道駅にはイベント開催に適した回廊や広場が点在しており、1日の乗降客は約3万人、始発から終電までの時間が開場時間となります。また小田原駅前地下街ハルネの広場をサテライト会場とし、公開円卓会議を開催しました。

広報

横浜市、神奈川県また建築士会などの他団体の後援をいただき、「神奈川新聞」などに告知記事を掲載。「横浜経済新聞」などのインターネット新聞などに取材をしていただき広報しました。また協力会の方々の力を借りてフライヤーの配布を実施、神奈川県内全ての市町村にパンフレットの配布を行いました。

資金

地域会費に加えて協力会からの企業協賛をいただきました。

プログラム

公開円卓会議や街歩き、作品展示など多彩な企画を展開しました。

## 公開円卓会議

「再考・まちのつかいかた」をテーマに、公開円卓会議を3つ開催しました。

## ①リノベが生み出す多様な賑わい

## — 関内は官能都市になりえるか？(センシュアス=官能)

全国の魅力ある街を「センシュアス」さ加減で分析した島原万丈氏(HOME'S総研「Sensuous City [官能都市]」)。新しい付加価値を持つリノベの実践で知られる内山博文氏(リビタ「シェアプレイス東神奈川」「BUKATSUDO」など)。2人の知見を重ね合わせながら、建築家と討議し、これからの横浜が魅力あるエリアになるための方法論を展開しました。

## ②賃貸のたのしい可能性

## 欲しい未来が賃貸の新たな地平を切り開く！

「青豆ハウス」「ロイヤル・アネックス」など、賃貸住宅での新しい暮らし方の実践で知られるメゾン青樹の青木純氏と、「泰生ポーチ」「さくらWORKS」など、関内エリアで新しいタイプの賃貸オフィスを展開する泰有社の伊藤康文氏。新しい暮らしの価値を、賃貸住宅や賃貸オフィスで実践しているお2人が、賃貸の可能性を紹介し建築家と討論しました。

## ③小田原流のまちづかい

パネリストに、NPO法人小田原まちづくり応援団理事長 平井丈夫氏、相州こゆる木・よせぎの会代表 高木大輔氏、NPO法人チルドリン副代表 福田ひろみ氏、小田原商工会議所会頭 鈴木悌介氏、商い創造研究所代表 松本大地氏など地域遺産を活用、木づかい、子育て、地域エネルギーなどのさまざまな分野でまちづくりに取り組む人々と、JIA神奈川からは飯田善彦代表、小泉雅生副代表が参加し、「小田原流のまちづかい」を討議しました。小田原市長にも参加いただき、建築家と市民の素晴らしい交流が実現しました。



公開円卓会議の様子(馬車道駅コンコース)



小田原での円卓会議の様子



小田原での円卓会議の様子



公開円卓会議(小田原)



## 第27回 JIA 神奈川建築WEEK かながわ建築祭2016

## デザインレビュー

建築家が現在設計中の公共建築を説明・プレゼンテーションし、公共建築はどのように考えられ設計されているのか、その建築はどのように使われていくのか、市民に向けて発表しました。現在横浜市では市庁舎のデザインビルドによる建て替えが進行しており、市民と公共建築そして建築家がそれにかかわれるのか考えました。この企画は横浜市との共催により実現しました。

## 神奈川近代建築展

横浜を中心に築50年を経過した建築を対象に調査記録し、写真展としてパネル展示しました。毎年調査件数を増やしていき、神奈川県全域の近代建築をアーカイブすることを目標にしています。パネル展示は記録本としてまとめて出版もしています。

## 復興橋梁・防火帯建築展

横浜は震災・戦災を乗り越えることで都市の形成が進みました。都市資産としての防火帯建築や、デザイン的にも美しい復興橋梁に焦点を当てた写真展です。横浜の復興史を振り返る展示となっており、これをきっかけに横浜市橋梁課との共催でワークショップなどの企画が進んでいます。

## 建築家のしごと展

建築作品のみならず、まちづくりの取り組みなど幅広い建築家の職能にフォーカスした展示とし、デザイン相談のブースも設けて市民との交流の機会を作る試みも行いました。地域会の垣根を越えて、関東甲信越支部所属建築家の多数の参加がありました。

## まちをつくる建材・技術展

JIA 神奈川協会の製品、技術展示です。協会の方々による発表の場とし、正会員との交流の促進とさらなる協力を得るための企画です。

卒業設計コンクール、  
神奈川の大学の卒業設計展示・公開審査

県内の学生のための発表の場です。会場に作品を展示、公開審査で優秀賞を決定しました。真剣な討議は観客の目をひきつけ、今年も素晴らしい提案が選出されました。



神奈川近代建築展



神奈川近代建築展



建築家のしごと展



卒業設計コンクール、公開審査



卒業設計コンクール、公開審査



デザインコンペ「一番小さな交流のかたち・茶室」

### デザインコンペ「一番小さな交流のかたち・茶室」

「一番小さな交流のかたち」と題して全国から作品を公募。応募資格を広く建築士、学生とすることでJIA会員以外からの応募も受け付け、入賞者をJIAへの勧誘につなげようという試みです。今年は国外からの応募もあり、応募総数70点と認知度が高まりました。優秀作品は会場内に制作し、公開審査で最優秀賞を選出しました。

### 街歩き「ちがった視点でまちを見る・ボートで街歩き」

横浜市内の運河に水上交通のための停留所が新設され、水辺が少しずつ開かれてきています。大型の水上タクシーをチャーターして、横浜市内の運河を遊覧、復興橋梁や水辺からの街の表情を見学しました。JIA会員笠井三義氏によるレクチャーを船上で行いながら2時間のクルーズです。この企画は横浜市橋梁課との共催で実現しました。

### オープンハウスツアー

公開円卓会議との連動企画で曾我部氏がアテンド。かつてストリップ劇場だった場所がシェアオフィスとして利用されているなど、都市空間に新たな価値を見出すリノベ作品を見学しました。



デザインコンペ「一番小さな交流のかたち・茶室」



ボートで街歩き

今年は横浜市のメイン会場に加え小田原市でも公開円卓会議を開催することができ、少しずつですが神奈川全域に私たちの取り組みを表明していくその一歩が築けたと思います。広報や市民参加の取り組みなど、まだまだ検討することは山積みですが、今年も建築祭を行い、建築文化の普及に努めてまいります。



# エコロジカルな 建築、都市、ライフスタイルの発信地 オーストリア・ウィーン



渋川美佐

私が大学院を卒業してから、初めて建築設計の仕事に就いた街はオランダのアムステルダムでした。平坦なオランダの土地から、美しいアルプスの山々や自然がすぐそこに広がるオーストリアの首都ウィーンに移り住んで13年になります。ウィーンでオーストリア人の夫と設計事務所を始めて10年近く経ちましたが、この街で子育てをしながら建築の仕事に関わる中で日々感じることや、気付いたことをお伝えしたいと思います。

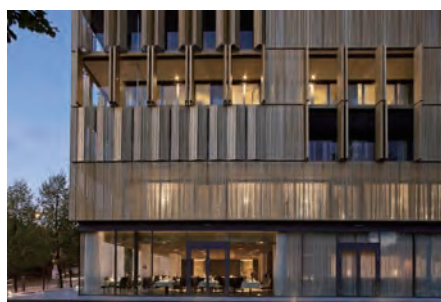
## 自然と建築

オランダからオーストリアに来て、まず感じた大きな違いは自然と建築の関係です。オランダには山がなく、海面より低い平地に運河を巡らせて人工的に作った国土に建築を建てているので、建築自体で人工的にランドスケープを作り出したり、建築家のコンセプトがそのまま空間化されて、斬新なデザインが生まれる傾向があります。それに対して、オーストリアの建築文化にはまず守るべき大自然が第一前提としてあります。建築を創る姿勢が非常にエコロジカルで、自然エネルギーを使うことにも高い関心があります。デザインも自然と素材そのものの良さや、ディテール、空間の快適さなどが重視される傾向があり、特にスイスに近い山間の地方では、木材を使った良質でミニマムなデザインが主流です。

私の事務所では学校建築を多く設計していますが、公共建築のコンペでは必ずエネルギー効率の良い設計提案をすることが設計要項に書かれており、州によっては省エネルギーの厳しい基準を満たす建築が求められます。



オーストリアの大自然



ファサードのデザインとなる日除けパネル

例えば、以前設計した学校では、敷地内に地下120mまでU字管を36本埋設し、不凍液を循環させて地中熱を集め、暖房と温水に使うヒートポンプシステムを採用しました。建物の断熱性を高めるために外壁材の外に20cmの厚さの断熱材を使用し、窓にはトリプルガラス、そして太陽光の照度に自動的に反応する外付けのブラインドを使用しています。窓を開けることで気密性が損なわれないよう、教室内のCO<sub>2</sub>の濃度が高まると自動的に空気を循環させる空調システムも使われています。これらの初期投資はとてコストがかかりますが、エネルギー消費量は低く、ランニングコストは低く抑えられます。

## エネルギー問題と建築

日本では東日本大震災以降、エネルギーの問題が大きくなっていますが、オーストリアから日本に帰国すると、エアコンで冷暖房することによるエネルギー消費があまりに大きく、非効率であることに気づかされます。建物の気密性や断熱性があまりに低いのです。冬に熱を逃がさないための外断熱と、夏に日射を遮蔽する外付けのブラインドや日射除けはオーストリアでは標準装備で、設計者が必ず考慮すべきものです。環境対策としてこの2つだけでも日本で広く普及すれば、エネルギー消費量を抑えることに寄与できるのではないかと思います。

オーストリアはヨーロッパの先進国の中でも原発を持たない数少ない国の1つです。実は1972年にウィーンから



美術館やギャラリー、カフェが集まるミュージアムクォーター

50kmほどしか離れていない街に原子力発電所が建設されました。多大な建設費をかけて完成したにもかかわらず、1978年に国民投票が行われてオーストリア市民が原発に反対する選択をしたため、結局一度も運用されることがありませんでした。現在エネルギーの半分以上は水力発電で賄われていて、総電力消費量の約60%を再生可能エネルギーが占めています。

今でもオーストリア国民には、自分たちの手で原発にNOと選択したのだという意識が強くあり、そして何よりも美しいオーストリアの大自然を誇りに思っています。そのことはオーストリアでも地方に行くときと良くわかります。どんな小さな地方の町でも新旧の建物が自然と調和して綺麗に保たれていて、湖や河川は飲料水としての水質です。日本の地方を訪れると、どこの県に行っても同じように開発された中心地がある一方、びっくりするほど過疎化が進んでいる地域がありますが、この国では各州の自治体の独立性が高く、州民の自らの州への郷土意識もとても強い上にすでに70年代から自然保護と観光に力を入れているので、どんな田舎へ行っても景観と州独自の文化が保たれているのです。また観光地としてどんなに魅力的な場所でも、経済論理優先で商業施設や住宅地の開発が行われることがなかったということは、街や自然の景色を見れば一目瞭然です。

なるべく地元で生産されるエコロジカルな建材を使って、自然環境と調和した建築を建てるという姿勢はこの国の食文化の在り方とも共通しています。オーストリアにある有機農地面積の割合は20%とヨーロッパのオーガニック先進国です。環境に意識が高い消費者が多く、スーパーではオランダやスペインで大量生産された野菜も安い値段で売っていますが、少し高い値段でも、なるべく地元に近いオーストリアの生産地で、オーガニック農法で作られた、旬の新鮮な野菜や肉を買おうという人が私の周りでも多いです。

## 世界で一番住みやすい都市

ウィーンは7年連続で2016年も「世界で最も生活環境が良い都市」の1位にランキングされています。実際に住めば住むほど本当に住み心地の良い街です。なぜこの街が魅力的かということは、ここに住む人々のメンタリティ、自然環境や文化との関わり方、経済、ライフスタイルにも大きく関係していて、それがそのまま建築や都市のあり方に反映されていると思います。

ウィーンはパリやロンドンなどの大都市と比べるとこぢんまりしていて、中心地は歩いてどこでも行ける大きさですが、文化の充実度は大都市に負けないもので、音楽分野はもちろん、芸術、建築、食文化がとても豊かな街です。ここではコンサートに行ったり、さまざまな芸術に触れることは子供の頃からごく身近なことで、それは街の誇りでもあります。

大都市ではないので、大企業というものがあまりなく、建築分野でも日本のような大きなゼネコンがありません。小規模な設計事務所が多く、他の職業分野でも私の周りでは個人で仕事をしている人がほとんどで、街全体が自由で多様なライフスタイルに包まれています。まずスーツやネクタイをしている人はあまり見かけません。街が小さいので通勤時間が短く、家族との時間や余暇の時間を大切にできます。共働きで小さな子供がいる家庭でも母親か父親が交代で、午後3時には子供を幼稚園や学校に迎えに行き、ゆっくりと午後を過ごす人がほとんどです。

私は東京出身なので日曜日に街中の店が全部閉まってしまう不便さに慣れるまで数年かかりましたが、今では素晴らしいことだと思っています。なぜなら必然的に週末はゆっくり家族や友人と過ごしたり、近くの自然に出かけようということになるからです。ウィーンを中心に住んでいても、車や電車で30分も行かないうちに森やぶどう畑が広がっていて、自然がとても近くにあります。東京の街で感じるような、消費をしなければいけないという脅迫感はなく、経済至上主義ではない豊かな暮らしの選択肢がここにあると感じています。



ウィーンの街を見下ろすワイナリー



荻野寿也氏に聞く

## 樹形の美しさを生かした庭づくりをしたい

聞き手：Bulletin 編集委員



——造園家になったきっかけがユニークそうですね。

1999年に自宅の設計を建築家の坂本昭さんをお願いしたことがきっかけです。その時に、造園は女性のガーデンデザイナーをお願いしました。僕は庭にいろいろな植物が植えてあるのが楽しくて、いかにもつくったという感じがなくて好きなのです。でも、お願いした庭にかわいらしい植物も入ってきたので、少しずつ自分の思うような庭に改造していきました。

その頃家を建てようとしていた友達が、僕の家を見て「こういう家がいいな」と言うので坂本さんを紹介したら、坂本さんが、「庭は荻野さんならできるから、好きなようにやったらいい」と言われ、そこから庭の仕事が少しずつ始まりました。

それが建築家の目にとまって、造園の仕事の依頼がくるようになりました。そして伊礼智さん、渡辺康さん、彦根アンドレアさん、前田圭介さんたちへと紹介でつながっていきました。

——同じ建築家との仕事が長く続いているようです。

同じ建築家から依頼が続くのは嬉しいですし、一度仕事をさせていただいた建築家が、樹木のことをさらに考えるようになるのも嬉しいですね。

前田さんの最近の作品はほとんど断面構成を含めて、建物と緑を併せて考えているようです。JIA新人賞を取った「アトリエ・ビスクドール」の緑の見え方はすごく面白かったです。伊礼さんの設計でも緑の使い方が変わっ



アトリエ・ビスクドール（設計：UID 一級建築士事務所）

てきたと思います。

——仕事の仕方、樹木へのこだわりを教えてください。

造園をする前からゴルフ場の造成、メンテナンスの仕事も継続しています。親はもともと建材屋でして、僕は工業高校の建築科を卒業してから建築の現場監督を6年やっていたので、建築は素人というわけではありません。

造園の仕事は僕が現場で采配しています。設計だけでなく現場にも出てスコップを持って木を植えていますから、立ち位置は職人のほうですね。

地域の原風景を造園に取り入れていくのが僕のやり方です。例えば周囲に松林があったら、敷地に松を1本入れるだけで、もともとの景色と自然につながっていきます。そのときには境界のようなものは、ないほうがいいですね。

これまで生産農家は樹木を背丈プラス幹まわりで売ってました。普通であれば「株立ちのシマトネリコ、高さ3.5m」のように注文します。けれども僕はそういう注文をするのではなく、樹形は非常に大事なので必ず自分で確かめに行きます。そこで見つけた片枝が飛んでいたりする樹木を組んでいく楽しさがあります。僕は、幹が太くて動かない木よりも、少しの風で揺れている木のほうが建築に合うし、面白いと思います。

これまで生産農家はおもに公共用の樹木をつくってききましたが、今は管理が大変だといって公共ではあまり樹木を使いたがりません。そのため生産農家は仕事なくなって辞めるところも多いようです。

しかし、僕のまわりでは造園がブームになっています。生産農家と一緒に「こういう木を日陰で育ててほしい、そうすれば柔らかいラインになるでしょう」、「密に育てた背の高いひょろっとした木がほしい」「斜面地で作ったひねった木もいいですね」と、育て方から考えています。

枝の張り方は縄張り争いですから、太陽を求めて枝が競争している姿がきれいだと思うのです。





造園工事の様子



第35回ジャパン建材フェア  
高岡の家軸組展示（設計：伊礼智、施工：田中工務店、造園：荻野寿也景観設計）

——全国各地でお仕事をされていますね。

関西以外でも造園の仕事があれば、できるかぎり受けるようにしています。現地の造園業者やワークショップメンバーを募り、20～30人集まって2泊3日で終わらせることもあります。全国に造園業者との横のつながりがあって、有り難いことにうちの造園が面白いらしく、若い造園家がどんどん来てくれます。

地方の仕事では、メンテナンスが大変でしょうと言われるかもしれませんが、そんなことはないです。施工後は基本的に地元の工務店が家も庭も管理していくことが多いです。工務店の出入りの造園業者に応援に来てもらって、僕たちのやり方を包み隠さず教えています。来週は九州の生産農家が庭のワークショップに来るので、木の組み方を教えることになっています。

それから、地方にいくと町をずーっと歩いて、植生の調子がいいもの、悪いものを調べますね。樹木の頭がぎゅーっと枯れ落ちている分譲地もありました。それは土が硬いか排水が悪いので、土壤改良したほうが良いとアドバイスすることもあります。雪国だったら庭の木に雪が積もって枝が折れたら折れたでいいと思います。山の風景はそうでしょう。唯一大変なのは落ち葉の時期です。近隣に迷惑がかかるという感覚がなくなればもったいいのですが。でも掃き掃除は時代が変わっても大事なことです。表のコミュニティーとはそういうことではないのでしょうか。それを否定したら樹木を入れられなくなってしまう。

——事務所の体制や仕事の仕方を教えて下さい。

年間60件、それも一流の建築家と仕事をしていて、すごく勉強になります。スタッフは15名いますが建築学科出身もいます。

うちの場合は、スタッフを独立させるのではなく、それぞれ得意なジャンルをつくって任せていきます。

今はプロポーザルやコンペへの参加が多いですね。大変なこともあります。私たちはコンペの段階から参加したいと思っています。コンペのパスで樹形も組んでいって、木の肌や影までリアルに表現して平面プランにも植栽を入れていきます。最近勝ったコンペでも、造園が他と全然違うと評価していただきました。

ホームページにも力を入れています。掲載する写真は大事なので、プロのカメラマンに撮ってもらいますが、小さな現場だったら撮影代のほうが高くなることもありますよ。もちろん建築家が依頼したカメラマンから購入することもあります。

——日頃意識していることはありますか？

建築家から見たら、それはやめてというくらい強すぎる石組みをする造園家もいると思います。建築設計者は引き算で極力シンプルに、作った感じをなくしたいと思っているのに、それを台無しにしているものがあります。建築・造園サイドを問わずにどちら側からも、また一般のお客様から見ても良いと思われるようなものづくりが理想です。

それから、華道にも興味がありますね。女房が華道の先生なので、僕は造園を手がける前からそれをずっと見ています。「そうじゃない、こっちの方がかっこいい」とよくけんかをしていました(笑)。流派をくずしていくのが面白いですね。

日本庭園では花はあまり取り入れられないと言われるなかで、僕は色花も入れます。かわいらしいとまでいかななくていいですが、色が入ってくるほうがいいと思っています。

居間に対しての造語ですが、「<sup>にわま</sup>庭間」も意識しています。近頃はアウトドアがすごく受け入れられていますね。家に帰ってきても、テレビを見るだけではなくて、庭に出て植物に癒やされてほしい。実際そうなってくれたらとても嬉しいです。



三井ガーデンホテル京都新町 別邸（設計：竹中工務店）

——印象的な仕事について教えてください。

三井ガーデンホテル京都新町 別邸のような商業施設は、みんなに見てもらえるでしょう。「あそこのホテルは庭がいい」と言われると励みになります。

ただ、自分としては住宅がいちばん面白いです。住んでいる人に1年を通して見てもらい、次に訪ねたときには、その人がアレンジしているんですね。植物を足したり、植物を株分けして近所に配ったりというような話を聞くと嬉しいです。

伊礼智さんの「下田の家」は小さい物件ですが、木がすごく効いていますね。また前田圭介さんの「森のすみか」は、建築そのものが庭のようです。このような植え方は、樹木の美しさが分かっていないと設計できません。きれいな樹形を見せると、雰囲気はがらっと変わってきます。横内敏人さんは、とても庭好きな建築家だと思います。横内さんのパースは全部手描きで、そこに樹木が必ず入っています。それで私に「こんなイメージを描いています、荻野さん好きのようにやってください」と言うのです。そんなのできません(笑)。それくらい緻密に描いています。

今やっているハウスメーカーとの仕事で、分譲地のありかたを変えようとしているものがあり、それは京都近郊の高級住宅地です。そういうところに興味がある客層には、高級なキッチンを入れてもなかなか売れないのです。そこで緑と日常生活を過ごすため、<sup>にわま</sup>庭間のある空間に取り組んでいます。

——造園の立場から、建築家に望むことはありますか。

開口についてもう少し考えた方がいいと思います。多くは外光のためと外からの視線を気にした開け方になっています。特にハウスメーカーの住宅は開口が多いでしょう。伊礼さんはいかに開口を減らしていくのかを考えていて、しかもそれが効いていると思います。



下田の家（設計：伊礼智）



森のすみか（設計：UID 一級建築士事務所 / 前田圭介）

それから、今は気密性とよく言われますが、僕は家の中まで風を入れるべきだと思います。ちょっとやんちゃな人の設計の方が、住んでみたい建築になっているように感じます。

マンションでは絶対できない断面構成と、緑の取り入れ方を上手くしたら、一軒家を建てたいと思う人が増えるのではないのでしょうか。

インタビュー：平成28年3月18日 東京ビッグサイトにて

聞き手：長澤徹・八田雅章

## PROFILE

荻野寿也（おぎの としや）

造園家  
荻野寿也景観設計 / 荻野建材株式会社  
代表取締役



1960年 大阪生まれ。  
1989年 家業である荻野建材に入社。同時に緑化部を設立。ゴルフ場改修工事に機を、樹木、芝生を研究する。  
1999年 自宅アトリエが第10回みどりの景観賞（大阪施設緑化賞）を受賞。以降独学で造園を学ぶ。  
2006年 設計部門として荻野寿也景観設計を設立。  
2013年 長野県松本市景観賞受賞。  
原風景再生をテーマに造園設計・施工を手がける。建築家との協働多数。



# 第10回 JIA 北関東甲信越 学生課題設計コンクール2016 報告

北山恒氏(審査員長) 特別講演会 2016年3月18日(金)  
コンクール審査会 2016年3月19日(土)  
会場: 前橋工科大学



学生課題設計コンクール  
2016 実行委員長  
長田孝三

2006年3月に前橋市の旧麻屋百貨店を会場に、北関東甲信越6県(茨城・栃木・群馬・山梨・長野・新潟)の地域会が連携して開催した課題設計コンクールも、今回で10回目の開催となりました(2011年は東日本大震災で中止)。薄れかけた記憶をたどると、この事業は支部地域サミットの席で、当時群馬地域会代表の石川純男さんよりコンクール開催の相談を受けたのが始まりだったと思います。地方には建築学科のある大学・高専・工業高校が少なく、学生・生徒が他校と比較できない、交流することでの刺激も受けられないなどの現状から、他県と共に開催することで少しでも地域のお役に立てないか、これを群馬地域会の建築祭に合わせて行いたいとのことでした。その後何度か北関東甲信越6県の地域会代表がサミット後に集い、その中で2・3年生を対象に、学生たちが取り組みやすい「すまい」をキーワードに設計課題を持ち寄り、審査・講評するというコンクールの骨格ができていきました。2・3年を対象にというのは、大学進学や就職時にコンクール参加や受賞が少しでも役に立てば、との想いもありました。

当初は慣れないことが多く無我夢中でしたが、最近では手際よい準備と進行になっています。実行委員会の毎年の「課題」は審査員長の選任です。年度末の開催の上、前日の講演会と当日8時半からお昼までの群馬県卒業設計コンクール審査、午後の課題設計コンクール審査、そして表彰式が終わるのは19時と長丁場のハードスケジュールで、2日間の日程は大きな壁です。毎回3~4名の方に打診してようやく決まるという過程を経ています。

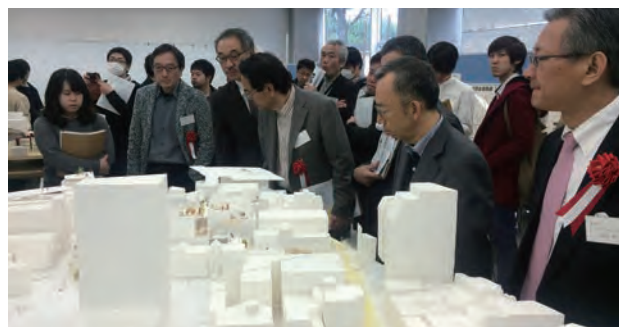
今回は元麻布のWORKSHOPに北山恒氏を訪ね、快諾をいただくことができました。6月から月1回のWEB会議と、11月高崎での合同会議のなかでコンクールの日程調整、ポスター制作や当日のスケジュール、参加校の決定や応募要項の送付と作品取りまとめ、データ整理など当日以外のさまざまな作業の積み重ねを行いました。

今回は大学・専門学校の部で13校の参加、工業高校の部には8校からの作品が集まりました。エントリーは1校2作品です。審査会場でプロジェクターによるプレ

ゼン、次に展示会場での図面と模型を前に補足説明と質疑応答。審査員からは矢継ぎ早に質問が飛び、緊張しながらも和気あいあいとした雰囲気の中審査は進みます。年々学生のプレゼン力は高まり、模型や3D画像はとてつもない迫力があり、建築を学び始めた学生の作品とは思えないほどの出来栄です。北山恒審査員長は全体講評で特に女子学生・生徒たちの作品の質の高さを評価しました。受賞はもちろんのこと、実務経験豊富な審査員からの講評や感想は、普段それを経験していない学生にとって貴重な示唆に富む宝物になっていると感じます。

大学・専門学校の部と工業高校の部でそれぞれ金・銀・銅の3賞、全体の作品から関東甲信越支部長賞、参加地域会の各地域会賞を審査委員の白熱した議論のうちに選出。会場を移して表彰式を行いました。そしてその場で北山恒審査員長特別賞の発表というサプライズで盛り上がり、盛況のうちに閉会しました。群馬地域会ははじめ参加地域会の多くの方々や、前橋工科大学と学生グループ「えん」の皆様のご協力に、この場を借りて感謝申し上げます。実行委員会の皆様、副委員長の鈴木さん・事務局の伊藤さんには至らぬ委員長を支えていただき深謝いたします。ありがとうございました。

学生・生徒の地域外交流と実社会職能人からエールをと始まったこの事業ですが、若いフレッシュな感性からピンピン刺激され、各地域会相互の交流が深まるなど私たちが得るものがとても大きかったと感じます。この事業により成長したのは学生・生徒の皆様よりも、私たち実行委員だったかもしれません。



公開審査風景

## 交流委員会

# 第28回 交流大会・交流セミナー・ 懇親会について



交流委員会  
法人協力Dグループ  
副代表幹事  
田島ルーフィング  
鳥嶋吉浩

去る3月10日に2015年度の交流大会・交流セミナー・懇親会が開催されました。当日は、多くのJIAの法人協力会員（個人協力会員の方も含む）の方たちや正会員の方に出席いただき、例年通り盛大に交流大会や交流セミナーが行われました。

### ■第一部 交流大会

開会宣言（挨拶）の後、交流委員会渡邊委員長より今年度の活動報告がありました。

主な内容としましては、

#### 1. 交流委員会活性化のために

##### ①活動活性化のための施策

専門分野7グループで構成し、他グループとの活動機会を増やした。

##### ②正会員の参加促進

ホームページに「教えて協力会員」PRと支部大会実行。委員会に3名の委員を派遣。

#### 2. 本年度の活動概要として

##### ①月例の幹事会

##### ②フレンズカップ

##### ③JIA建築家大会2015金沢大会

##### ④交流セミナー

##### ⑤広報部会

##### ⑥グループ活動

その後、交流委員会各グループの活動報告。A～Gグループの代表者より報告がありました。

続いて新規入会企業の紹介がありました。入会企業は(株)エフワンエヌ、(株)東京工営の2社です。今後も仲間を増やせていければと思います。

上浪支部長のご挨拶と次期支部長候補の藤沼様より、力強い所信表明をいただきました。その後、意見交換会が行われ、今後の支部活動について語られました。上浪支部長、長い間お疲れ様でした。

### ■第二部 交流セミナー

(株)スタジオジブリ代表取締役鈴木敏夫氏をお招きし、「ジブリへの軌跡を語る」というテーマで行われました。鈴木氏は長尾実行委員長の高校の先輩にあたり、尽力いただき実現しました。



セミナーでは、宮崎駿監督との出会い、各々の希望や葛藤をお話いただきました。また、2人の「良い作品をつくりたい」という強い思いが、老若男女が楽しめ、心に残る映画の誕生に繋がったと感じました。順調に見えた鈴木敏夫氏ですが、作品ごとにドラマがあり、波乱万丈でありました。

### ■第三部 懇親会

交流セミナー終了後、交流大会、交流セミナー出席の方たちと立食パーティー形式で、懇親会を開きました。またその席で、各グループの幹事の方たちからグループ活動の報告や新規入会企業の方のあいさつ等もあり、楽しい懇親会となりました。

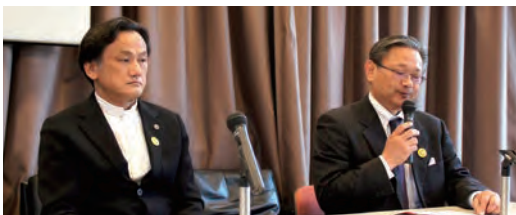
今年もみなさんの協力により、盛大な大会となりました。特に開催に当たり、長尾実行委員長や実行委員会の方たちと共に、協力いただいた方たちに感謝いたします。来年も今後のJIAの発展に役立つ交流セミナーを実施できればと思っています。



長尾俊夫実行委員長



渡邊顕彦交流委員長



上浪寛支部長（左）と藤沼傑次期支部長候補（右）



## 保存問題委員会

保存問題委員会の  
活動環境の変化と  
今後について

保存問題委員会  
委員長  
安達文宏

4月14日深夜に熊本県益城町<sup>ましき</sup>を震源とする震度7 (M6.5) の地震が発生しました。16日には再度震度7 (M7.3) が起き、これがその後本震とされました。活動域はさらに大分県まで広がりを見せています。被災された方々はじめ、現地で生活されている皆さまへ、心よりお見舞い申し上げます。

今から5年前の2011年3月11日に、東日本大震災が発生しました。その折、文化庁から文化財ドクター派遣を要請された建築学会からの依頼で、建築士会とJIAが共に調査への協力をしました。初年度の関東地方の調査においては、各県に学会とJIAの責任者が置かれましたが、JIAからは当委員会の委員が任命され、中心的役割を果たすことができました。その後、JIAには緊急時対応で設けられた修復塾の履修者を中心に、震災後3年目まで続く文化財の調査や技術支援を進めることができました。それを契機に、緊急時と平常時の文化財への対応が必要とされ、JIA文化財修復塾が2015年8月にスタートしました。座学と現地講習を併せて年9回のカリキュラムの中、今までの経緯から当委員会が、「東京駅・丸の内」と「栃木市」での現地講習2回の企画運営に協力しました。今回の熊本地震でも、文化財ドクター派遣事業が実施されますので、JIA文化財修復塾の履修者が活動に関わることになります。

また、2015年7月に建築学会から近現代建造物緊急重点調査事業への協力を打診され、JIAが建築士会と共に

協力することになりました。これは、文化庁から学会へ依頼されたもので、モダニズム建築をはじめとする多くの現代建築が解体の危機に瀕していることから、まずは近代建築総覧の現代建築版を作ろうとする試みです。文化財ドクターで築いた協力体制と信頼関係から依頼されたものと考えられます。JIA建築家大会岡山2014で発足したJIA保存再生会議に当委員会も一委員として参加していますが、この調査事業1年目である2015年度の活動の一つとして、近現代建造物に関係あると思われる既存資料をリストアップする作業にJIA保存再生会議のネットワークを使い、当委員会も各地域会からの資料集めに協力しました。

24回を数えた保存問題大会も、昨年度の東京開催を最後に今年度からは支部大会が群馬からスタートし、支部大会実行委員会へ「建築まちづくり」「環境」「災害対策」「国際事業」「保存問題」の5委員会と群馬地域会が加わり、大会を成功させるべく協力しました。JIA会員はもちろんのこと、一般市民、行政や他団体との交流と協力体制作りを目指しています。

今まで通りの保存問題委員会活動も行っていますが、以上のように、当委員会を包む環境は昨年度から大きく変わりつつあります。JIAの全国的ネットワークの中で、さらにはJIA以外の関係諸団体と共に保存問題を考えていく必要性を認識しつつ、新たな活動に向けて進んでいきたいと思えます。



JIA文化財修復塾現地講習(東京駅・丸の内)



JIA文化財修復塾現地講習(栃木市)

## 金曜の会

発足からの歩みと  
現在の取り組み

金曜の会  
部会長  
日高敏郎

今年4月に稲垣雅子氏から部会長を引き継ぎました。活動量の多いこの部会を上手く運営できるか甚だ自信はありませんが、引き継いだ以上は全力を尽くしたいと思います。

ご承知の通り、建築家クラブは建築会館が会館の理念「処士横議」の復活を目指し2008年に完成させましたが、本会には有志が集まり「建築家クラブ活用WG」の名称で本部の中に位置付けられました。「金曜の会」の名称は講演会を金曜日に行うことに由来しています。昨年4月の支部編入後は部会名称となっています。本会は当初より建築会館の支援をいただき、2012年からはNPO建築家教育推進機構の支援をいただきながら活動を行ってきました。両者には大変感謝申し上げます。

スタート時は、数ヶ月に1度の割合で講演会を企画していましたが、現在では毎月1回実施しています。発足してから7年、歴史は浅いですが、これまで60～70の企画を実施してきました。委員数は当初より若干増えましたが、実質的な委員は10名程度で、1つが終われば直ぐ次の会の準備に入る形で1年を通しフル回転している状況です。

## ■昨年度の活動を振り返って

昨年(2015.4～2016.3)は講演会11回と神宮花火大会観賞会を含めて12回の企画を実施しました。左官職人の久住有生氏の講演や数寄屋大工 三浦史朗氏と編集工学研究所所長 松岡正剛氏の対談など、関心を集めました。

特に記したいのは、新しい試みとして、講師のお話をさらに深く聞くため、1回だけで終わらず、同じ講師に年間6回講義していただく企画を立てました。6回を通して参加者を魅了できる建築家でなくてはならず、かつ労を厭わず受けていただける方でなくてはなりません。その高いハードルを越えて実現したのが、香山壽夫建築研究所所長の香山壽夫先生による「香山教授の建築炉辺談話」です。6回を通して建築の根源的なお話をレクチャーしていただき、参加者にとっては、ふと原点に立ち戻って日々流されがちな設計活動を見つめ直す良い機会となりました。これは本会の顧問で元JIA会長の大字根弘司氏のご尽力なくしては実現できなかったと思います。

## ■今年度の活動

今年の重点目標として、①6回連続講座の継続実施、②木造建築の可能性に焦点を当てた企画立案、③学生の参加人数を増やす取り組み、④部会移行に伴う運営方法および組織の改善の4点を挙げています。

まず①の6回連続講座については、建築家内藤廣氏を招聘して行うことが決まっています。この原稿が発行される7月には2回目の講義が実施される予定です。

②については、4月に東大名誉教授の安藤直人氏を講師として、森林と木材と建築を繋ぐ、俯瞰的なお話をしていただきました。引き続き6月には東京大学生産技術研究所の腰原幹雄教授をお招きし、一般建築、特に高層建築の木造化(都市木造)への取り組みをレクチャーしていただくことになっています。

③については、従来学生の参加者が極めて少ないことから、大学に対する広報活動を昨年開始しました。しかしながら、目に見えた成果は上がらなかったため、本年は学生有志2名に委員として参加していただき、学生の立場からの意見を取り入れながら方策を検討していく予定です。より深い知識の吸収と建築家との交流ができる場を提供していきたいと考えています。

④については、昨年、支部の部会に編入されたのを受けて、まだ過渡期ではありますが、きちんとした部会運営が図れるよう改善に取り組んでいます。

最後になりますが、活動メンバーが本当に不足しています。金曜の会に協力していただける人がおられましたら老若男女にかかわらず、ぜひ私までご連絡ください。よろしく願いいたします。



全6回の講義をしてくださった香山先生とパネラーの皆さん



## メンテナンス部会

マンションの維持管理に  
求められる建築家

メンテナンス部会  
部会長  
今井章晴

都市において主要な居住形態として広く普及したマンション。2014年末のマンションストック数は613万戸と推定され、いまだに年間10万戸以上のマンションが供給され続けている。旧耐震基準で設計された築後35年以上のマンション、高度成長期に郊外に供給された団地、小規模マンションから超高層マンションまでさまざまなが、それぞれのマンションの特徴を理解した上で、長期修繕計画に基づく計画修繕や性能向上を提案する建築家が求められている。また、管理組合という独特の組織への対応、最近では居住者の高齢化やそれに伴う管理組合の機能低下、空き住戸の増加など、マンションに関わる建築家の取り組む課題は多い。

メンテナンス部会は、個々の経験により蓄積された技術を共有し合い、切磋琢磨しながら自己研鑽に励み、会員の相互の能力を高めてきた。また、居住者や管理組合だけでなく、社会貢献という大きな目標を掲げ、活動の幅を広げ、関係団体での活動を通じ、経験と知見を持つ人たちと交わり、社会的役割を果たしてきた。

メンテナンス部会は、毎月1回開催している定例部会とセミナーを中心に、次のような活動をしている。

### 1. 定例部会とセミナーの開催

- 1) 定例部会において、会員相互の技術交流を図り、部会員の技能や資質向上を目指している。
- 2) セミナーは、「外部講師」と「内部講師」に依頼し、実践に基づく最新情報を講演していただいている。外部講師の方々には、行政の方に法改正や施策について、学識研究者の方々には研究成果等を講演していただいている。内部講師は主に部会員が務め、改修事例を発表し、相互に研鑽している。なお、セミナーにはJIA会員だけでなく、建築関係者や管理組合、学生など一般の方にも公開している。

### 2. マンション関連諸団体の事業に積極的に参加

世田谷区マンション相談に相談員を派遣するほか、耐震総合安全機構(JASO)やマンションリフォーム技術協会(MARTA)の活動に参加している。特に、JASOの耐震

アドバイザーとして、杉並区や新宿区など9区2市の自治体の耐震化支援事業に関わる中で、耐震診断から耐震改修に進めるマンションの耐震化のノウハウを身につけ、同時にマンション再生にも取り組んでいる。また、東日本大震災直後から被災調査を行い、今年も5月の大型連休に、福島県と宮城県を中心に第13次調査を実施した。

### 3. 既存建物の維持管理・再生・修復に関する調査・研究および出版

メンテナンス部会は、前身であるメンテナンス分科会の誕生以来、来年で30年という節目の年を迎える。そこで、マンションメンテナンスの変遷など、これまでの歩みを記念誌にまとめるべく作業を進めている。

### 4. マンションに求められる建築家

マンション改修工事は、既にある建物を、人が生活する中で行う工事で、さまざまな困難がつきまとう。建築家はその建築があるべき姿を描き、経験し体得した改修技術、専門知識や芸術的感受性に基づいた提案を管理組合に行うとともに、管理組合がその提案をもとに検討する過程でアドバイスをしながら後押しする。このようにマンション改修のスキルを持つ建築家が、管理組合に寄り添いながらプロジェクトを進めていくことで困難は必ず克服できる。メンテナンス部会は、このような建築家を技術面・精神面で相互に研鑽し支え合う場でもある。

これからもメンテナンス部会は、マンションの維持管理をキーワードに、建築関係者や管理組合、マンション管理関係者、さらには次世代を担う学生を含め、幅広い技術交流の場として、マンションに100年安全で快適に暮らすための活動を続けていく。



セミナー風景

群馬地域会

群馬地域会の活動について



JIA 群馬クラブ  
監査  
(2014~15 代表幹事)  
曾田 彰

この7月号が発行される頃、群馬地域会は第1回支部大会を終えてホッとしていることでしょうか。参加された皆様、初夏のグンマを楽しんでいただけたでしょうか。来訪ありがとうございました。

初めての支部大会開催ということで、支部実行委員会をはじめ多くの関係者の皆様とともに手探りで1年4ヵ月、走り続けてきました。地域会員にはかなりの負担を掛けましたが、それ以上に準備のプロセスでの支部との交流や、行政をはじめとした関係者、地域との間で生まれた繋がり、まさに地域会の「タカラ」になり得るので、それを今後どのように活かしていくのが開催地として求められていることと感じています。

さて、今回の地域会だよりでは、いわゆる非常時？とも言うべき支部大会準備とは違う、普段の群馬地域会の活動について紹介させていただきます。

群馬地域会は正会員28名、準会員2名、協力会20社と学生会員からなる小さな地域会です。会員の年齢構成としては30～70代までさまざまですが、50・60代の会員が中心となっており、次世代を担う若い世代にいかにかの魅力を伝え、入会していただくかに苦心しているところです。そのなか、県内唯一の建築系学科をもつ前橋工科大学の学生まちづくりサークル「えん」との交流があり、北関東甲信越学生課題設計コンクール当日の運営では彼らが中心となって活躍しています。コアメンバーを学生会員として迎え入れ、定例会や支部大会群馬実行委員会への出席、情報共有など、我々の学生へのサポートだけではなく、お互いがサポートし合える関係ができています。

地域属性としては、県央の前橋、高崎、伊勢崎の会員がほとんどとなっており、今後、県全域に仲間の輪を広げていくことが求められています。

群馬地域会では地域会活動費として、正・準会員1万5千円、協力会5万円の年会費を集めることでさまざまな活動を行っています。

セミナーや建築祭等の開催の他、特徴的な活動としては会員手帳と会員冊子の発行があります。会員手帳は常

時携行できるハンディサイズで、建築家憲章、地域会規約、組織表、年間スケジュール、会員名簿等を掲載しています。

会員冊子はA4判50頁ほどで、活動紹介と広報を兼ねイベント等で無料配布しています。冊子には毎年の活動履歴を掲載、記録しており、2016年版には念願であった1989年の地域会発足からの活動アーカイブスを作成、掲載しています。今後は内容のさらなる拡充を目指していきたいと考えています。各地域会事務局にも送付させていただきますので、ぜひお目通しいただければ幸いです。

協力会は会の行事に参加いただくだけでなく、協力会セミナー「建築家を支える技術」を年2～3回開催し、最新の技術、情報を伝えていただいています。秋のゴルフコンペや納涼会、新年会等でも会員間の懇親を深めています。

北関東甲信越学生課題設計コンクールは、地理的に6県の真ん中に位置することもあり、いままで全10回の開催地となっていますが、定期的に6地域会が集まり交流を図る貴重な場を地元で持たせていただいていることにメリットを感じています。

また、県内の他団体との交流として、会員に構造設計者3名がいることもあり、構造設計団体との共催セミナー等も行っています。

全国でも珍しい、建築関連6団体で共催する「ぐんま街・人・建築顕彰会」では、地域の建築まちづくり活動への顕彰を行っており、運営を通じて他団体との交流が年々大きなものとなってきています。

支部大会は終わりましたが、これからも群馬の魅力を発信していきたいと思えます。大会に参加された方は再度、そうでない方はぜひともグンマにお越しください。



会員手帳



会員冊子



# コンペ・プロポーザル方式による 選定業務を JIA は支援します



建築・まちづくり委員  
後藤克史

本コラムのタイトルは、JIAまちづくり会議作成の自治体支援のためのリーフレットの表題である。英国のCABE(Commission for Architecture and Built Environment)では、エネイブリング(Enabling)セクションが自治体のコンペ開催や建築家選定等の支援をしており、コンペ・プロポーザルの支援は日本においても受け入れやすい仕組みと考えられる。建築・まちづくり委員会がワーキンググループとなり、全国まちづくり会議、フェロシップ委員会の協力を得て作成した。コンペ支援の経験があるJIA会員へのヒアリングをはじめ、JIA金沢大会での全国まちづくり会議、各支部との議論における利用目的および今後のJIAが自治体と協同していくための示唆は、当リーフレットの内容に反映している。

## ■地域性を取り入れる

全国まちづくり会議でCABE的(専門家の第三者性を公益のために有効活用する)な萌芽事例を共有する中で、地域性の存在が明確になった。専門家と地方自治体との関係は地域が抱える問題と同様にさまざまであり、お互いがコミュニケーションを取ることでより創造的関係を築くためのツールとして利用できることが、当リーフレット作成の趣旨である。1年間を試行期間とし、各支部地域の意見をもとに地域ごとの特徴を反映させたコンペ・プロポーザル支援の仕組みを目指している。

## ■リーフレットの概要

### 1. 公共資産と第三者性

発注方式が多様になる中、公共建築においては設計と施工の分離発注が基本であり、コンペ方式、プロポーザル方式は受益者である地域住民に対して公共資産の質を担保する適切な方法である。そのためにはコンペ・プロポーザルでは独立性と公平性が必須であり、JIAは公益社団法人として第三者的立場での支援が可能である。

### 2. コンペ・プロポーザルの基本事項

基本事項を1.応募要項、2.審査・審査員、3.運営、4.住民参加の4項目とした。中には克服すべき課題もある。参

加要件を登録建築家とするなど、実績によらない公平な要件とし、若手建築家の参加を促すことは狙いの一つである。審査員の構成は設計者が参加を決める直接的要因であり、審査方法の客観性と合わせて信用性を保つ唯一の方法である。日本版CABEを考える上では住民参加は大切であり、地域性を反映させるためにも各支部地域の事例をもとに支援の一環としてその仕組みづくりが重要である。さらに、コンペ後の協議調整の場やデザインレビュー、審査員による継続的なサポートは、コンペ・プロポーザルを補完する仕組みの一つになると捉えている。

### 3. JIAの支援・報酬

#### 〈専門家の活躍の場を広げる〉

支援に応じてJIAに対しての報酬が必要であることを明記している。しかし、過去の事例では、支援はJIA会員個人の資質や奉仕の精神などによるところがあった。今後も良質な建築・まちづくりの制度を考える上で、専門家の価値が市民、行政に評価され活躍の機会をつくることを、専門家の資質の向上と共にその対価としての報酬を考えていかなければならない。

当リーフレットはツールでありプラットフォームである。建築・まちづくり委員会では日本版CABE(良質な建築・美しいまちづくりの仕組みづくり)につながる萌芽事例と関連のあるご意見を求めている。

コンペ・プロポーザル支援リーフレット



JIA建築家大会2016大阪  
大会実行委員長  
松本敏夫

皆さま、こんにちは、「ようこそおいでやす」大阪よりご挨拶申し上げます。

いよいよJIA 建築家大会2016 大阪が開催されます。昨今の東京一極集中の状況において、地方創生が大きなテーマになっていることを受けて、今回は大阪を題材にしてこれからの街のあり様を考える大会にしたいと考えております。

グローバル化の影響で均一化した街から地域特性豊かなローカルへ視点を切り替えて、人が活き活きと生きていける環境(街)とは何かなどを考えてみたいと思います。

今、大阪の評価はあまり良いとは言えない状況にあります。しかし大阪の街には独特の歴史的背景と人情、そしてオリジナリティーがあります。何時もあらゆるジャンルの発信基地とも言われています。大正時代以来、経済に偏り過ぎた結果、文化がなおざりにされた感もありますが、おっとどっこいよく見ると近代化遺産はじめ多くの社会資産があることを発見します。そういった土壌から大阪の発信力の豊かさへ繋がっているとも言えます。

落ち着いた街には必ず時代の変遷が刻まれ、それらが人々の記憶の媒体となり未来へ繋がっていくと確信いたします。成熟期に差し掛かり、価値観の多様性が求められ、それぞれが尊重され、融合することで偏った格差を超越し、笑いに包まれた生活の営みを通して、ともに安らかに生きられる社会が求められています。

今を嘆き・叫び・語り・聞き・考え、最後に笑える、もう一度足元を見つめ直し「繋いできたもの、繋いでゆくもの」を再考し、近未来のあり様への問題提起で独自の発展形を模索し、自分の住む街を皆様とともに考える機会にしましょう。ぜひ、多くの建築家が参画されますことを期待いたしますとともに、皆様のお越しを大歓迎で迎えたいと、心よりお待ち申し上げます。



次期近畿支部長(予定者)  
井上久実

皆様！JIA建築家大会2016が大阪にやってきました。

近畿支部では、昨年、大阪地域会が発足したところ。まさにグッドタイミングとなりました。大阪地域会のキックオフ企画としてはあまりにも大きいイベントですが、苦難をもともせず立ち向かっていく大阪人のど根性で、近畿支部一丸となって大会を盛り上げてまいります。

昨今、大阪をはじめとする地方都市はあまり元気がありません。さまざまな問題を抱え日々戦っています。そんな状況を我々建築家が先陣を切って、打ち破っていきたい。そのキッカケとなるようなテーマ=我々建築家に求められる姿勢を、大阪らしい言葉で考えてみました。

「笑い」とは“緊張や対立を緩め、距離感の近さを保ちつつ交渉を円滑してくれる生活の知恵”です。テレビなどで流通される「商品としての笑い」ではなく、本来の大阪が持っていた“生活の知恵”としての「笑いの文化」をテーマに置くことで、この閉塞した状況を“明るく突破する”可能性が見出せるのではないかと、そしてそういった可能性を一人一人の建築家が社会に発信していくことに大きな意味があると考えました。また、実質を重んじながらも固定観念に囚われない考えを持ち、冗談や洒落、ユーモアにより緊張感を緩めながら、結果のみならずプロセスそのものをも楽しむ、ということが大阪の文化と笑いのエッセンスであります。それは我々建築家の本質に通じます。

この建築家大会では、一般公開のイベントも多々用意しています。それらの場において、建築家の役割を明確にアピールし、存在する価値を認知していただき、社会とそこに住まう一人一人に向けて、もう一つの「笑い」である「微笑み」を発信していきたい所存です。皆様にぜひご参加いただき、一緒に戦っていただければ幸いです。笑都大阪でお待ちしています！

## 「大阪の文化と笑い」\*を基に、6つの笑いが一つに繋がった大会ロゴマーク

\*関西大学名誉教授の井上宏氏の著書

### ①実質文化と本音

建前よりも本音が大事。建前を本音で崩すことで笑いが生まれる。

### ②交渉の文化と勘定の文化

交渉ごとには笑顔は付き物。時と場合により、さりげなく微笑みながらきつい冗談の一つもかわさないといけない。

### ③「する」文化と楽の思想

人生を楽しく過ごそうという姿勢は、笑いのある人生を大切に思っていることに繋がる。

### ④創意の文化と柔軟思考

新しいものを創るもとはアイデア。笑は固定した観念を斜めに見たりずらしたりすることで生まれる。アイデアに笑いが関係する。

### ⑤口の文化と大阪弁

言葉の言い回しに工夫をし、洒落やユーモアを入れて笑いに結びつけていく。

### ⑥プロセスを楽しむ文化

形のあるものよりプロセスを楽しむ風が強い。③の「する文化」と④の「創意の文化」に通じる。

## 大会ロゴについて

関西大学名誉教授の井上宏先生が、「大阪の文化と笑い」について、左記の6つのポイントを挙げておられます。

これらそれぞれを「笑う」アイコンとし、今大会のサブテーマでもある「繋いできたもの、繋いでゆくもの」と関連して6つの「繋がる笑い」を表現しています。一つ一つの笑いの繋がりが大阪文化を生み出したとすれば、笑いの文化は大阪の誇りであることを踏まえ、建築とは人や街を楽しませるもの。今大会を通して、建築家と人、建築家と街、建築家と文化など、大阪の様々な繋がりを「笑」を通じて、これから更に繋がっていくことが、込められたロゴとなっております。

[www.jia-osaka.org](http://www.jia-osaka.org)





## 大人向け？子ども向け？

WHO BUILT THAT? MODERN HOUSE

WHO BUILT THAT? SKYSCRAPERS



2014年秋、福祉施設の視察を兼ね、シドニーへ行きました。

食欲の秋= Bills本店で世界一の朝食を満喫、芸術の秋=オペラハウスでクラシックを鑑賞し、読書の秋は？と思っていた中、出会った本がこちら。

## 1. WHO BUILT THAT? MODERN HOUSE (Didier Cornille)

サヴォア邸や落水荘など、1900年から最近の住宅の建設方法、その建築家の他作品、建築家本人など、全てかわいらしいイラストでの紹介です。英文ですが、イラストから内容は理解できます。

## 2. WHO BUILT THAT? SKYSCRAPERS (Didier Cornille)

エッフェル塔やシーグラムビルなど、1889年から最近の超高層ビルの構造種別、建設方法など、1と同様イラストでの紹介です。

どちらも同じ大きさの本ですが、建物の高さに合わせて、住宅は横長、超高層ビルは縦長での製本です。

メルボルンのフェデレーション・スクエアにある店舗の、子どもコーナーで見つけました。小さい頃からこの絵本(?)を読めば、建築家志望の子どもは増えるのかなと感じた瞬間でした。

2015年冬、極小住宅の本を求め、二子玉川の葛屋家電へ行きました。建築コーナーで、見覚えのある赤い背表紙：WHO BUILT THAT? MODERN HOUSEを見つけました。

日本でも購入できたのね…いろいろなことが頭をよぎりましたが、印象的なのは、絵本コーナーではなく建築コーナーにあったことです。

(浦 絵美)

## 新年度の抱負

■今年は、広報委員への新任、ワーキングママへの新任と初めてづくし。熱く初編集を行うはずが、暑すぎる5月にノックダウン。どちらもほどほど、楽しく頑張ります。(浦)

■今回初めて支部のお仕事に携わることとなり、若干緊張しております。皆様の足手まといにならぬよう、微力ながら頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。(上原)

■広報委員となって4年が過ぎ、そろそろ卒業と思っていたら、あと1年、『Bulletin』の編集にかかわることになりました。新委員の方々と、新しい企画ができればと…。引き続きよろしく願います。(八田)

■委員会という集まりに参加するのは、もしかしたら中学校以来かもしれません。久々の委員会活動を楽しむとともに『Bulletin』が充実した内容となるよう頑張ります。(長澤)

■信州から微力ではありますが、貢献できるよう、夢を持ってがんばりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。(吉田)

■個人的な3か条：徹夜をしないで朝方にする・なるべく沢山歩く・ご飯は腹八分目にする(小山)

■JIA 新入生で分からないことが多いですが、新しい出会いを大切に、がんばります！(清水)

■「初めてのこと」と言うことと、特に今年度は不定期な出張が多くいろいろとご迷惑をお掛けするかと思いますが、微力ながら精一杯やらせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。(中山)

■公益社団法人への移行とともに始まった広報委員長の任期も最終年。今年では会長および支部長も一新、広報委員会の新たな道筋を模索します。(高橋)

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会  
関東甲信越支部 広報委員会

委員長 : 高橋隆博

副委員長 : 八田雅章

委員 : 小山将史・長澤 徹・中山 薫・上原和彦・吉田 満  
清水裕子・浦 絵美

編集長 : 八田雅章

副編集長 : 長澤 徹

編集ワーキングメンバー : 倉島和弥・市村宏文・立石博巳・小山将史  
中山 薫・浦 絵美

編集・制作 : 南風舎

Bulletin 264 2016. 7

発行日 : 平成28年6月15日

発行人 : 浅尾 悦子

発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館

Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294

印刷 : 株式会社 協進印刷

■JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧

・(公社)日本建築家協会(JIA) <http://www.jia.or.jp/>

・建築家online(一般向け) <http://www.jia-kanto.org/>

・JIA 関東甲信越支部(会員向け) <http://www.jia-kanto.org/members/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

©公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2016

LIXIL

Link to Good Living

不眠不休で、空気を見守る壁。



リクシルのタイル建材(エコカラット)

知られざる開発ストーリー、WEBで公開中。

湿度は、季節で変わる。1日の中でさえ、変わっていく。乾燥していたかと思えば、過剰な湿気は結露さえ生じさせる。そんな問題の解決のヒントは、日本古来の蔵にあった。蔵を囲う「土壁」には、内部の湿度を調整するという知恵が生きている。ならば土を素材にタイルをつくり、室内の壁材として使えないか。

その発想を可能にしたのは、素材となる土への飽くなきこだわりと、

100年以上にわたり伝承されるリクシルのやきもの技術だった。

膨大な検証の末、完成した「エコカラット」。この壁材が有する1mmの100万分の1というサイズの無数の穴は、湿気を吸い、快適な湿度に戻す性質をもつ。それだけではない。

時に中に閉じ込めた湿気を放出し、過乾燥の抑制さえも可能にした。

面の広さを活用し、壁全体で呼吸する。人々が安らぐ部屋の中、壁は今日も空気を見守っている。

“そこまでやるか”を、どこまでやるか。リクシルの目は、目に見えない領域まで見つめている。

MADE *By* LIXIL.

それが、リクシルのものづくり。

INAX の技術は、LIXIL へ。